

内と外のレトリック

The Inside and Outside Rhetoric for the Literary Text

森田 均*¹
Hitoshi MORITA

*¹ 県立長崎シーボルト大学国際情報学部情報メディア学科
Faculty of Info-Media Studies, Siebold University of Nagasaki

This document describes two dimensions of perspective for the elements of the literary rhetoric. A) Inside: traditional use of rhetoric. B) Outside: the background knowledge is used to construct the text and the real world.

1. はじめに

従来、レトリックあるいは修辞とは、表現形態は様々であってもテキスト内部の意味作用あるいは相互連関とするのが一般的である。また、そもそもテキストに「外部」など存在しないという考え方もある。本研究は、こうした先行する試みとあえて異なる視座から出発する。すなわち背景知識あるいはテキストの背景を、実世界との接点と位置づけ、外のレトリックと仮称する。従来テキスト内部で検討されて来たレトリックは、内のレトリックとする。このようにレトリックの概念を拡張し、一定の事例を示した後に、相互の関連を考察する。

2. 内と外の「背景」

本研究は、1) ネットワーク社会の形成に係る研究[森田 01]、2) 新たなメディア表現に係る研究[森田 06]の 2 系列からなる研究の成果を統合する過程において最初の着想を得た。執筆当時は自らが生活する社会の情報化を推進する役割を担っていたこともあり、1)では理論的な枠組みよりも現状認識と現実的な展開を得ることが研究の端緒であった。これに 2)の系列が加わることによって、コンピュータ・サイエンスの技法が利用可能となったこともあり、研究の方法論を強く意識するようになった。2)で得た研究手法をさらに 1)に拡張するための試みを行う研究に着手しようとするに至った。

3. 外のレトリック

テキストと実世界との接点を明示するレトリックとしては、以下の3点を想定した。

3.1 グラフ・地図・樹状図

[Moretti 05]は、文学の一般的なあるいは抽象的なモデルを求めるために時間的にも地理的にも膨大に広がる様々なテキストの解釈ではなく、グラフ、地図、樹状図を用いて地理学や生物学の手法を援用して文学研究の論文に図表を取り入れた。これに対して[Morita & Fujita 04]及び[森田 04]で明らかにしたが、筆者による従来の研究で「注文の多い料理店」の刊本や二次的作品の網羅的収集から得られたグラフは、図 1 に示したように、ある一つのテキストが時間経過によってどのように増殖するのか、また表現形態の広がり具合を概観するために作成したものであった(図 2)。また、テキストの論理構造から図 3 のような論理マップを示すことができる。この地図は、Moretti が地理的なものを

用いているのに対して物語世界の論理マップを描けたにすぎない。これは、当該テキストの内部に具体的な地名が含まれていないことによる[森田 04]。

3.2 歴史資料

テキストの時間及び空間による条件の相違などに対応すべく、手始めに長崎県由来関連の歴史資料を検討対象とした。活版印刷、新聞、無線電信など長崎を開闢の地とするメディアは数多い。活版印刷に関しては、天正遣欧使節の従者コンスタンチノ・ドラーゴを対象とした。また、松浦静山による『甲子夜話』は、平戸のみならず文政・天保時代の社会風俗に触れている。本文の校訂は慎重に行われているが膨大なテキストに即時活用可能な索引が作成されていない。一方でこのテキストから様々な時代劇や時代小説が誕生するなど、物語の種子とも言うべき役割を果たしている。このテキストについて、構造を明らかにするモデルを作成し、電子化の予備作業を行った。地域に残る近世近代のテキストをデジタル化する先行研究は存在するが、当該テキストから別の作品が派生する「物語の種子」として位置づけられた[森田 06a] [森田 06b]。

3.3 映像作品

映像作品のうちテレビ番組に関する内容分析は、暴力シーンが青少年に与える影響などをテーマとする社会心理学的な研究、テレビ番組の記号化というメタレベルにまで視野を広げた野心的な研究など、様々な分野で数多く行われている。どれも対象を限定してはいるが、コード化は恣意的である。本研究では、対象を禁欲的に局所化し他に応用可能な成果の獲得を目指す。

具体的には、対象を平和祈念式典に集約し、長崎は同じ被爆地として 8 月 6 日の広島をどう見ているか、広島は同じ被爆地として 8 月 9 日の長崎をどう見ているか、という視座からテレビ番組を録画収集し、量的及び質的分析を行った。

具体的な手順は、以下の通り。

まず、事前にインターネット上に公開されている電子番組表等から調査当日の番組情報を入手して収集計画を立案した。

8 月 6 日: 広島における平和祈念式典に関して地上波テレビ局による全ての中継番組をビデオ録画した。対象は、式典中継の他に当日午前6時代から 23 時代のローカル・ニュース、原爆関連番組。広島側はテレビ放送タイムテーブルに従い、午前8時の式典と 18 時代の自社製作枠を中心とする。長崎側も基本的には同様で、「長崎は同じ被爆地として 8 月 6 日の広島をどう見ているか」という視座から資料収集を行った。

8 月 9 日: 長崎における平和祈念式典に関して地上波テレビ局による全ての中継番組をビデオ録画した。対象は、式典中継の他に当日午前6時代から 23 時代のローカル・ニュース、原爆

連絡先: 森田均, 県立長崎シーボルト大学国際情報学部情報メディア学科, 〒851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1, Phone & Fax: 095-813-5105, morita@sun.ac.jp

関連番組。長崎側はテレビ放送タイムテーブルに従い、午前11時の式典と18時代の自社製作枠を中心とする。広島側も基本的には同様で、「広島は同じ被爆地として8月9日の長崎をどう見ているか」という視座から資料収集を行った。

上記の作業によって収集された資料から明らかになったのは、以下の点である。

- 経年変化を見ると、番組の数や総時間数は、曜日によって異なる。つまり通常の放送フォーマットを逸脱するほどのコンテンツではない。
- 同一年で比較すると量的には、8月6日広島発が最も多くなる。これは式典時間が朝の全国ニュースあるいはワイドショーと連動可能であること、長崎の全国中継は2000年以降に定着したコンテンツであること(広島式典は1958年より)などがその要因と考えられる。

4. 内のレトリック

続いて、テキスト内部のレトリックを示す。伝統的な修辞の事例ではあるが、4.3にあるような厳密な分類は内から外を描くようなメタ修辞とも言うべきレトリックを可能にするものと考えられる。

4.1 因果関係

物語テキストの論理構造については、命題と命題間関係の類型に着目した分析[阿部・他 94]、の他に機会誘引関係、可能化関係、因果関係、評価関係、連鎖関係、展開関係に分類する手法がある[Hobbs 85]。

4.2 構造解析

テキストのレトリックを利用して構造を解析する。まず、頻出語や他のテキストにも出現するような特異な言い回し等、語や文を抽出する。以下、「注文の多い料理店」の事例を示す。

- 全228文、5486文字、149段落
- 登場人物:二人の紳士、猟師、白熊のような犬二匹、二つの青い目玉、親方
- 主人公である二人の紳士は、「紳士(7)」、「二人(25)」と表記(括弧内は出現回数)
- 特徴的な表記:括弧で括られた「注文」が13回出現
- 頻出語:扉(28回)。「注文」は扉に記されている
- 特徴的な表現:「風がどう」(3回)
 - ◇ 風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。(23)
 - ◇ ブラシを台の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうと室の中にはいつてきました。(90)
 - ◇ 風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。(219)

こうして抽出した事項をまとめたものが表1である。表中の2と3が対となる。これは、「白熊のような犬」という同一の主語に対して、述語が矛盾している[森田 05]。

4.3 文学修辞学

[Lausberg 63]においては、テキストを変更する文学的修辞として以下の4点が明記されている。

- § 59. 付加: 新たな構成要素を少なくとも一つ付加すること
- § 60. 除去: 少なくとも一つの構成要素を除去すること
- § 61. 置換: 内部構成要素の少なくとも一組の位置を変更すること
- § 62. 交換: 内部構成要素の少なくとも一つを外と交換すること

このように分類された修辞に対して実際のテキストにおける適用可能性を検討した。「注文の多い料理店」の原テキストでは「それに、あんまり山が物すごいので、その白熊のような犬が、二匹いっしょにめまいを起こして、しばらくうなって、それから泡を吐いて死んでしまいました。(9)」とまず冒頭で犬の「死」を明らかにしている。ところが結末部分では、この「死んだ」犬に助けられることになる。これは表1でも「矛盾」として示したものである。翻案テキストでは、この矛盾を回避すべく、次のような「書き換え」が行われている。

- あんない人も 犬も どっかへ 行って しまい、がっかりしながら、みちを さがして いました。(紙芝居1)→「迷」
- あんないにんも いぬも どこかへ 行って しまい、にしもひがしも わかりません。(翻案絵本2)→「迷」
- あんまり やまが ものすごいので、いぬも めまいを おこして、たおれて しまいました。(翻案絵本4)→「倒」

この事例は全て「§ 60.除去」のうち効果の強度を弱める「強さの除去」に含めることができる。

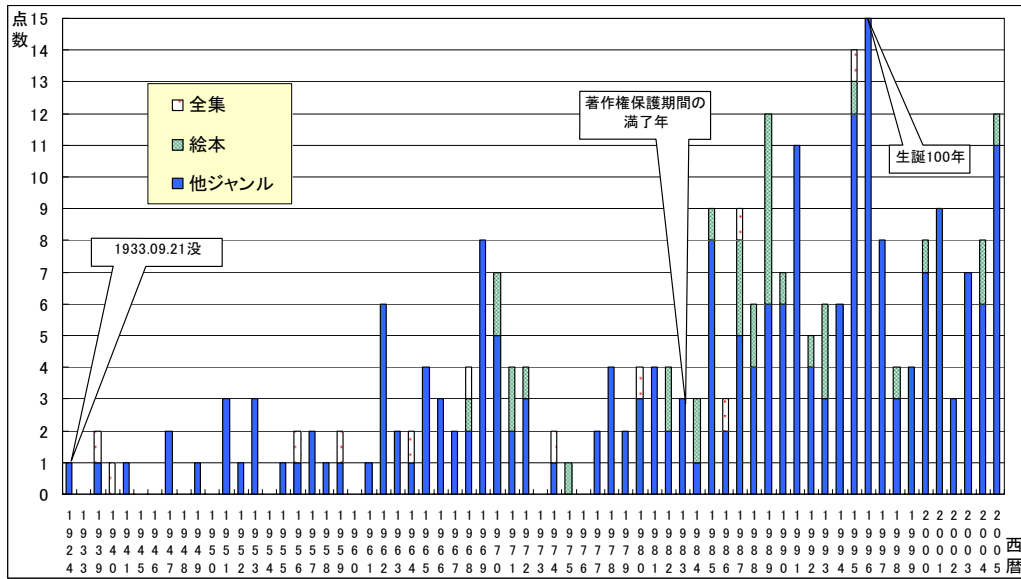
5. 結論と展望

本研究では、文学テキストと実世界との関係をシステムとして明らかにするために、レトリックをテキスト内における戦略(読み易さやごまかし)と、テキストの外にある社会や事件との相互干渉とに分類して考える手法を示した。

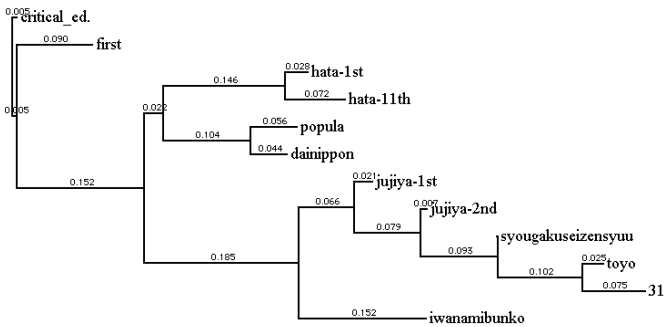
今後は具体的な事例の収集と分析を行い、いくつかのモデルを構築する。

参考文献

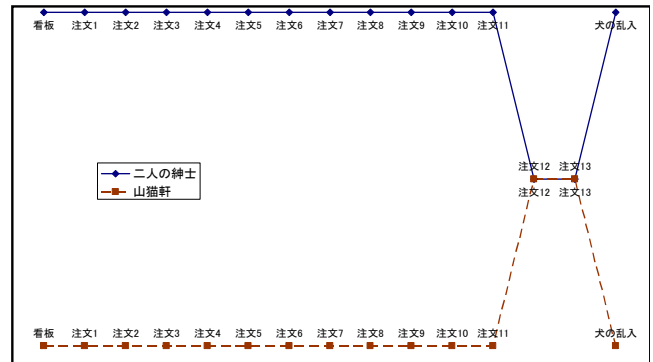
- [阿部・他 94] 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五: 人間の言語情報処理, サイエンス社, 1994.
- [Hobbs 85] Hobbs, J. R.: On the Coherence and Structure of Discourse, CSLI Report No.CSLI-85-37, CSLI, 1985.
- [Lausberg 63] Lausberg, H.: Elemente der literarischen Rhetorik, Max Hueber Verlag, 1963. (萬澤正美・訳, 『文学修辞学』, 東京都立大学出版会, 2001)
- [宮沢 66] 宮沢賢治: 注文の多い料理店, 童話集銀河鉄道の夜, 岩波文庫, 1951(1966).
- [宮沢賢治学会 91-06] 宮沢賢治学会: 宮沢賢治ビブリオグラフィ・同ディスコグラフィ, 宮沢賢治研究 Annual vol.1-16, 宮沢賢治学会イーハトーブセンター, 1991-2006.
- [Moretti 05] Moretti, F.: Graphs, Maps, Trees, Abstract Models for a Literary History, Verso, 2005.
- [森田 01] 森田均: コミュニティ放送局のインターネット利用, マス・コミュニケーション研究 59号, 日本マス・コミュニケーション学会, 2001.
- [森田 04] 森田均: 注文の多い料理店のグラフ・地図・樹状図, 国際情報学部紀要第5号, 県立長崎シーボルト大学, 2004. (『国文学年次別論文集平成16年度版近代編』へ再録)
- [森田 05] 森田均: 「注文の多い料理店」のハイパーテキスト変換とその評価方法, 国際情報学部紀要第6号, 県立長崎シーボルト大学, 2005.
- [森田 06a] 森田均: 長崎コンテンツのメディア論的研究と資料デジタル化予備調査—天正時代の活版印刷と甲子夜話のハイパーテキスト化—, 県立長崎シーボルト大学「教育研究高度化推進費B」に係る研究報告書, 2006.
- [森田 06b] 森田均: フローティング・ハイパーテキスト—起源と展開, 国際情報学部紀要第7号, 県立長崎シーボルト大学, 2006.



<図 1: 「注文の多い料理店」のグラフ>



<図 2: 「注文の多い料理店」の樹状図>



<図 3: 「注文の多い料理店」の地図>

<表 1: 「注文の多い料理店」の基本構造>

テキスト内の時間	番号	機能	テキスト
早い (始)	1	書出	二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいたい山奥の、木の葉のかさかさしたとこを、こんなことを言いながら、あるいておりました。(1)
↓	2	矛盾	それに、あんまり山が物凄いのので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起して、しばらくうなって、それから泡を吐いて死んでしまいました。(9)
↓	3	同一文	風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。(23)
↓	4	反復	<西洋料理店山猫軒>の看板: 以下扉に記された注文 13 回
↓	5	矛盾	そのときうしろからいきなり、「わん、わん、ぐわあ」と言う声がかして、あの白熊のような犬が二疋、扉をつきやぶって室の中に飛び込んできました。(210, 211)
↓	6	同一文	風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとん、ごとんと鳴りました。(219)
遅い (終)	7	結末	しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした。(228)